



Project summary

SUMMARY

- 1) SPUC (DAY 1)
- 2) IDRÆTSSKOLEN FOR VOKSNE MED UDVIKLINGSHANDICAP (DAY 2)
- 3) KIFU (DAY 2)
- 4) PARASPORT DENMARK (DAY 2)
- 5) VIDENSCENTER OM HANDICAP (DAY 3)

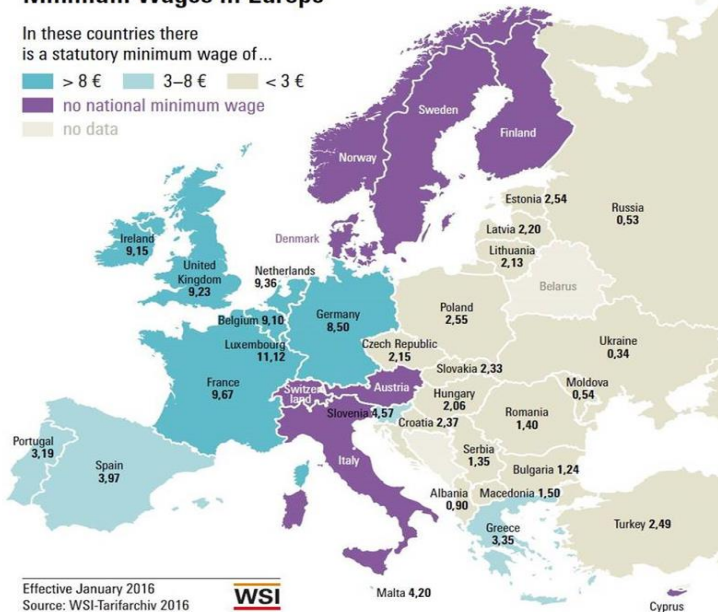


デンマークには最低賃金に関する法律がない
その代わりに、労働市場協定がある

Minimum Wages in Europe

In these countries there is a statutory minimum wage of...

- > 8 €
- 3-8 €
- < 3 €
- no national minimum wage
- no data



<基本情報>

98市町村、5地域、州市町村と州には税収があり、社会保護のほとんどが市町村の責任で運営され、保健衛生のほとんどが地域は、州の管理の責任となっている。州から市町村へのブロック補助金が配分され、市町村による資源の均等化を図っている。またニーズに応じた支援、法律により公平な異議申し立て制度がある。

- 児童手当 就学支援金（最長6年間） 最高820ユーロ/月
- 老齢年金（65歳or67歳から） 最高1,706ユーロ/月
- 障害年金（労働能力が35%未満の場合） 2,471ユーロ/月
- 社会扶助 最高1,906ユーロ/月

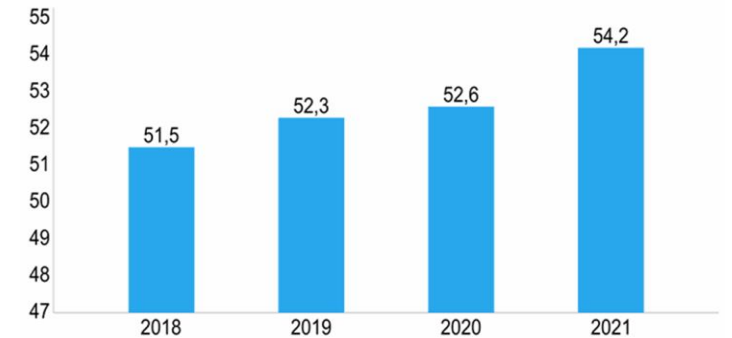
デンマークにおけるボランティアの割合は、長期にわたって人口の約40%で安定している。

～以下詳細～

- ボランティアは幅広い分野で貢献している。
- スポーツ分野が最も多い（12パーセント）
- 住宅・地域コミュニティ分野（6パーセント）
- 社会分野（5パーセント）
- その他

障害者サービスにかかる費用
2018-2021年

Udviklingen i kommunale udgifter på det specialiserede socialområde i regnskab 2018-21 (mia. kr. 2022 pl)



Kilde: Momentum. Egne beregninger pba. kommunale regnskabstal

Helsingør Kommune, Socialpædagogisk Udviklingscenter (SPUC)

コペンハーゲン市から北に約45kmのヘルシンオア自治体（人口約46,000人）にある「社会教育開発センター（SPUC）」を訪問。この施設は、知的障がい者を対象とした総合支援施設で、障がいの度合いや年齢に応じたグループアパートや集合住宅、デイサービスや余暇施設等を備えている。またスタッフは、「ペダゴギー」と言われる社会生活支援員をはじめ、介護士、事務職、音楽家、体操指導員、准看護師、調理師等、計80名以上がその支援にあたっており、施設全体の利用者は200名程度にのぼる。何よりこの様な一つのコミュニティを形成している点も非常にユニークである。

一方、デンマークの自治体は、平日の夜には全ての労働者に余暇サービスを提供する事になっており、このサービスは、障がい者にも同様に提供される。勿論、SPUCにおいても、知的障がい者の為に様々な余暇活動の場を提供しており、スポーツ活動や音楽活動、絵画、パソコン、料理等を実施している。特にスポーツには力を入れている。主な種目とスタッフの人数などは、以下の通りである。

●フットサル

3チーム／コーチ5名／30人が利用／水・金曜日実施

●バドミントン

1チーム／コーチ2名／10人が利用／月曜日実施

●水泳

コーチ3名／20名が利用／金曜日／

●ハンドボール

1チーム／コーチ2名／10名が利用／土曜日

●陸上競技

コーチ3名／15名が利用／水曜日



Idrætsskolen for Voksne med udviklingshandicap

今年で30周年を迎える知的障害者を主としたスポーツ施設。コペンハーゲン市から200,000DKK／年の援助を頂き運営をしている。敷地面積は700平方メートルという広大な敷地を有している。

活動時間は、5時間／日（9時～14時）であり、9名の体育専任コーチと校長・マネージャー・アシスタント2名が指導にあっている。勿論、スポーツを中心とした活動がメインだが、音楽（主にドラム）などの音楽の授業も取り入れており、生徒には人気の授業となっている。現在、50名（コペンハーゲン市から25名、コペンハーゲン市外から同様に25名程度受け入れている）ほどが、この施設に通っており、全員18歳以上である。

また、知的障害者だけでなく、自閉症・精神障害・肢体不自由・脳性麻痺など様々な障害をもった人々も受け入れている。9名の体育専任コーチは、PT（理学療法士）などの資格を保有している訳ではないが、同施設における研修が充実しており、様々な生徒の要望に応えることが出来る。

また、このような組織としては珍しく、8名の評議員と2人の理事で経営が行われており、その中には、知的障害当事者も含まれる。

今回の訪問で確認できた活動の中で特徴的だったのは、音楽を使った身体ほぐし運動メニューである。音楽の速度にも工夫がされており、参加者がそれぞれの体力・技術にあった形で自由に活動できることが確認された（動画を添付）。

勿論、生徒たちは、年金などの公的資金を活用して、参加費用を捻出しているが、デンマークにおいて、特別なことではないという。



KIFU, Københavns Idrætsforening for udviklingshandicappede:

コペンハーゲン知的障害者スポーツ協会。この協会では、大人向けのスポーツメニューと子ども向けのスポーツメニューを分けて提供している。

■大人向け：バドミントン・ボディバイク・卓球・ボーリング・ダンス・eスポーツ・フィットネス・サッカー・ハンドボール・水泳等

■子ども向け：バドミントン・eスポーツ・水泳・トランポリン等である。

常勤のスタッフは、2名と少ないが、それぞれのセッションは、専門スタッフが運営しており（コンテンツはそれぞれのスタッフが考える）、常勤スタッフは全体をコーディネートするのみである。2名の年収は、日本円で約1,600万円程度（約800万円/人/年）であり、これを実労働数に応じて配分している。そして、専門スタッフにおいては、5・10・15年の節目には、「賞」を頂くことができ、モチベーションに繋がっている。

また、専門スタッフ以外にも合計63名のボランティアスタッフも、この活動を支えている。尚、メンバー（参加者）は、1,200DKK支払いおよそ15h/週の活動を教授している。

更に年に3回出版物を発行しておりスポンサーなどの企業に提供している。同協会もこれまで紹介した団体同様に、パラスポーツデンマークとは、密に連携しており、情報の提供や選手発掘に大きく寄与している。

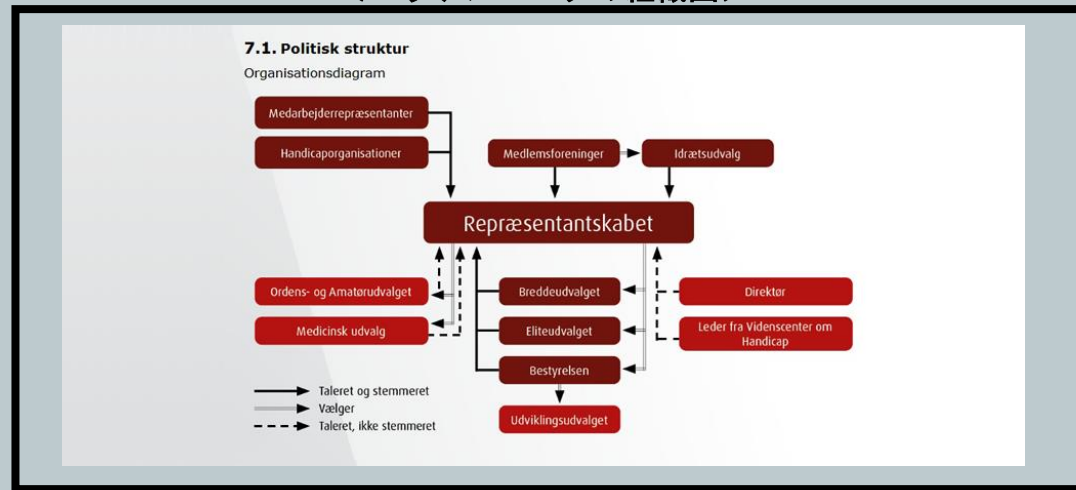


Parasport Denmark①:

パラスポーツデンマークのビジョンと戦略2025（2020-2025）では、障害や特別なニーズを持つ人々のための運動や競技スポーツの条件や環境を促進するために、DIF、DGI、SPFおよび自治体などの他組織と積極的に協力・連携することで、事業を拡大し活動している。

<重点施策>

- ・ **パートナーシップ**
⇒スポーツ界のプレーヤー、自治体、民間俳優とオープンな協力関係を結ぶ
 - ・ **コンピテンスセンター**
⇒2025年までに、コンピテンスセンターは、身体的および社会的に活動を続けるのに役立つスキル、知識、資金の観点から何が必要かについての詳細な情報を提供する
 - ・ **ロビー活動**
⇒政府に対して、誰もが享受できるスポーツの権利を主張し、当事者に代わり活動を強化する
 - ・ **国際的な活動**
⇒IPC/EPC/IBSA/Virtusなどの国際組織へ役員を輩出
- <パラデンマークの組織図>



Parasport Denmark②:

パラスポーツデンマークにおける収入は、以下の通りである（非公式）

<PARASPORT DENMARK INCOME 2022>

Subscription from member clubs

260.000dkk (00,75 %)

Inheritance from private wills

4.291.000dkk (12,44 %)

Secretary of Culture

11.589.000dkk (33,61 %)

Danish Association of Sports

4.300.000dkk (12,47 %)

Funding

492.000dkk (1,40 %)

Sponsors

5.787.000dkk (16,80 %)

Public collection and Lottery

557.000dkk (1,62 %)

Advertising in Parasport Magazine

569.000dkk (1,65 %)

Projects paid by external stakeholders and funding

6.224.000dkk (18,00 %)

Financial income

414.000dkk (1,20 %)

TOTAL

34.483.000dkk (100,00 %)



Videnscenter om Handicap:

デンマーク障害者知識センターは、今年で28年を迎え、非常に歴史がある非政府・非営利団体である。そして、当センターは、特定の診断や障害診断や障害に焦点を当てるものではなく「障害」についての幅広い知識と理解を有し、知的障害・精神障害・身体障害・感覚障・認知障害などに関して研究を行っている。また、ビジョンとして、「すべての人が活動的な生活を送り、社会への完全な参加を経験できるようになることや社会への完全な参加を経験する」ことを掲げている。

上記のビジョンを正しく履行するために以下の5つの大きな柱を掲げている。

※一方、今回の研究とは直接関係ないが、このセンターの建物は、多くの有効な工夫が施されていた。例えば、建物自体がハブのような作りになっており、4つの建物は、色分けされていて、いつでも中央部分（総合案内）にアクセスできるようになっている（そこを通らなければならない）。また、建物のデザインも車いすユーザーを意識し、壁に穴が開いており、上記のようにいつでも中央（総合案内）がのぞける仕組みになっていた。



Purpose of the project (max 100 characters)

競技性の高い知的障がい者スポーツと日常行われる知的障がい者スポーツの環境について、関係する団体等を訪問し、日本との相違点を明らかにし、今後、日本にて活用できる新たな視点を探る事を目的とした。

Short report about how the project was executed (max 600 characters)

まず、今回のプロジェクトに関しては、受け入れ先の言語的な問題が懸念されたため、National Board of Social Service に勤務していた Elisabeth Nørgård Andreassen 氏を通じ、各関係機関へのコーディネートをお願いした。もともと彼女は、派遣者(杉 雄一)が、内閣府の派遣事業(2011)において、デンマークを訪問した際のホームステイ先の方で、それ以降も積極的な交流を深めていたため、今回のプロジェクトに関して協力を得ることが出来た。

次に具体的な手順として、当方より今回の派遣の趣旨をメールにて彼女へ連絡し、必要な人的リソースを検討して頂いた。その結果、当初、我々は2箇所のみでの訪問(先)を予定していたが、彼女の尽力で、5か所および彼女自身からもレクチャーを受けることになり、実際には、日数も1日延長する形となった。大幅な予定変更ではあったが、すぐに事務局に確認を取り、決して後ろ向きな予定変更ではなく、今回の目的(趣旨)に合致した予定変更であることを伝え了承を得た。

また、訪問先に関しては、こちらからの質問・要望を伝えるだけでなく、お互いがより有益な情報交換や交流が出来るために、当方からも、必要な日本の情報を、前もって提供した。その結果、実際の訪問の際には、効果的かつ有用な意見が交わされ、一つ一つ疑問に感じていたことが明らかとなった。

最後に、全ての訪問先では、十分な資料の提供・パワーポイントなどでのレクチャーなど、大変温かい歓迎を受けた。

Short economic report (list the major costs, no details. Receipts shall not be enclosed, but be kept by the grantee in case the Foundation at a later stage would request to see these.)

- 渡航全般に関する費用⇒801,740 円(旅行会社による見積り・請求書あり)
(内訳):国際航空券・羽田空港税・国際観光旅客税・現地空港税・燃油サーチャージ・海外旅行保険・Wifi 機種代金・Wifi レンタル補償代金
- 宿泊費⇒252,222 円(カード支払い明細書あり)
- 現地交通費⇒30,334 円(タクシー)+30,000 円(現地鉄道移動費)
- 接待費⇒14,625 円(Elisabeth 氏)
- お土産⇒13,950 円(訪問先)

合計:1,142,871円

Results of your project, e.g. dissemination of reports, articles etc (max 2000 characters)

今回の訪問前には、福祉国家として知られている「デンマーク」は、基本的に日本より様々な面で進んでいるという前提で、ほとんどの場合において参考になることがあるのではないかと考えていた。しかし、結果的には、そのようなところも勿論あるが、一方で、日本のシステムも逆にデンマークが抱える問題や課題に関して、お手本になる部分も散見され、まさに、タイトル(派遣趣旨)通り、両国の相違点を明らかにできたのではないかと考える。

そこで、順を追って、プロジェクトの成果として言及したいと思う。

まず、日常的な知的障がい者のスポーツへの取り組みは、完全に日本の取り組みと異なっており、簡単に言えば、地域総合型スポーツと同じ仕組みであり、地域でアクティブに活動できる様々なセクターが存在しており、場合によっては家族がそのコーチとなって支えているところもあった。スポーツの種類は、陸上競技(マラソン含む)や水泳・フットサル・ハンドボール・バドミントンまたズンバという音楽に合わせて踊るものなど、バラエティーに富んでいた。例えば、最初に訪問した、SPUCでは、そこに入所している方々が、こうしたスポーツを日常にかかわることが出来、知的障がい者だけでなく、自閉症、肢体不自由の方々も一緒に活動していた。

一方、日本では、特別支援学校を卒業すると、基本的に知的障がい者がスポーツを行える環境は備わっていないと言っても良いかと思う。あるとすれば、グループホームにおける外出や生涯学習の場(青年学級と呼ばれるもの)における活動であるが、これは誰もが享受できるものではなく、むしろ、その場所へのアクセスに問題があるように思える。

そして、やはり福祉国家としての強みは、参加者における費用負担である。これらの多くは、年金などで支払いをすることが出来、決して安くはないが、利用者はその恩恵をしっかりと受けていると話していた。何より、「障害者インクルージョン」と表現して良いかと思うが、様々な障害者が一緒に活動することに何ら違和感を覚え、皆が楽しく、自分の体力にあったスポーツを選び、週における回数などを選択している。また、それらを家族もそして地域も受け入れている事実は、なかなか日本では見られない光景であった。

その上で、最も特徴的だったのは、訪問した某所における活動である。我々が訪問した時は、知的障害者の陸上競技チームが活動をしていたが、なんと、知的障害者当事者がコーチとなり、知的障害者を指導していた点だ。勿論、指導している知的障害者もアスリートであり、2019年にブリスベンで開催された大会にも参加しているという。そして健常者のコーチは、その様子を温かく見守るだけであった。

次に、もう一つ当初の計画にあった、パラスポーツデンマークにおける活動である。こちら、先に行われたビシー2023Virtus グローバル大会において、日本を抜いて、金メダル獲得数が15個で第6位(日本は金メダル総数12個で第8位)であり、上記、地域での積極的な活動から、相当の支援体制かと想像をしていたが、実際は違っていた。まず、この15個の金メダルであるが、これは、全て II3と言われるカテゴリーであり、いわゆる知的障害を伴わない「自閉症」を対象としたクラスとなる。また、本命である II1(知的障害)や II2(ダウン症)では、メダルの獲得がなかった。更に驚いたことに、前出の SPUC は、この Virtus の存在を知らなかったこ

とだ。競技レベルからすると Virtus の下に、スペシャルオリンピックス(以下、SO)という世界的な組織がある。SO は、どちらかと言えば、草の根的な活動をメインにしており、勝ち負けよりも参加することに重きを置いており、SPUC の方々はこちらの存在は承知していた。

なぜ、SPUC が Virtus の存在を知らなかったのかというカギは、この支援体制にあった。パラスポーツデンマークは、ある専門員が、我々が今回訪問した団体などを定期的に視察するという。そして、その選手のレベルに合わせて、SO なのか Virtus なのか選手を振り分けるといふ。つまり、パラスポーツデンマークが全てをグリップしており、パラリンピックへの道も、ここがコントロールしていることになる。その結果、単に選ばれた選手は、パラスポーツデンマークの指示により、派遣されるという構図であった。ゆえに、地域で活動する多くの選手は、TOP(エリート)を目指しているわけではないため、結果的に、それにかかわる支援者やコーチは、Virtus の存在を知らなかったという事である。

最後に、パラスポーツデンマークでは、競技力向上に関して、どのような取り組みをしなければならぬのか、逆に日本のシステムを参考にしたいとの申し出があり、引き続きの連携・協力の確認を行うことが出来、当プロジェクトの趣旨に大いに合致し満足の行く派遣となった。

『デンマークにおける知的障がい者のスポーツ環境 の調査と日本との相違点について（写真）』



2023 年度

スカンジナビア・ニッポンササカワ財団助成金対象事業



一般社団法人全日本知的障がいスポーツ協会

会長 斎藤 利之（代表申請者）

〔活動の様子（写真）〕

	
<p>エリザベスさん</p>	<p>SPUC</p>
<p>事前打ち合わせ</p>	<p>担当者解説</p>
	
<p>Idrætsskolen</p>	<p>KIFU</p>
<p>授業風景</p>	<p>活動紹介ポスター</p>
	
<p>ParasportsDenmark</p>	<p>Videnscenter om Handicap:</p>
<p>入口</p>	<p>外観</p>



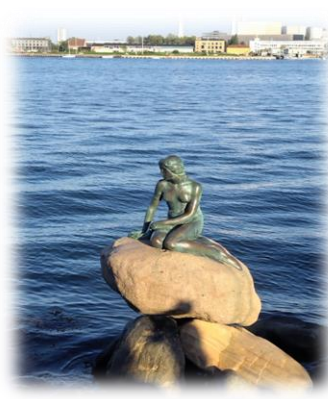
エリザベスさん宅
家族



デンマークの様子1
コペンハーゲン市街地



デンマークの様子2
コペンハーゲン市街地



デンマークの様子3
コペンハーゲン市街地

まとめ

今回、大変貴重な経験をさせて頂き、貴財団に心より感謝申し上げます。

当協会では、これまで英国・オーストラリア・韓国における、いくつかの研究を行ってきた実績はあるものの、この度、スカンジナビア地域（デンマーク）を訪れ、肌感覚も含めて、多くの情報を収集できたことは大きな財産となりました。特に、異なるタイプの5つの組織（施設）と、1つのスポーツ活動（現場）も拝見でき、それぞれの活動拠点における状況も正しく把握できましたし、何より、一般の知的障害者のスポーツに関わる機会の創出に、政府が莫大な支援をしていることに感銘を受けたところです。その反面、知的障害者のTOPスポーツの醸成には、若干の困難さがあることを確認できました。しかし、国民の理解と政府の支援が根底にあるため、選択と集中をどのタイミングで行うかで、大きな飛躍が可能となることも容易に想像がつかしました。少なくとも、知的障害者だけでなく、身体障害者、自閉症等、様々な障害を持っている方々が主体的となって活動をし、自分たち自らのQOL向上に積極的であることは、大変見習うべきことであると感じました。

当協会は、TOPスポーツから草の根的な活動までを支援しておりますが、今回の派遣報告を、政府やスポーツ庁等関係機関へ届け、更なる発展のために引き続き寄与していく所存です。その為の最大のムーブメントであります、知的障害者の総合大会の日本招致をできるだけ早いタイミングで実現させることは、我々の使命であると改めて認識しました。そのためのロビー活動を今後、より積極的に行って行きたいと思っております。

最後に、現地でコーディネートして頂いたエリザベスさんには、事前調整から現地でのアテンド（一部）に至るまで、相当のご尽力を頂きこの場を借りて感謝を申し上げたいと思っております。

